非燃物

綿貫孝哉

燃えにくいものがある。着火しないとか、焼却場で燃え残って市の職員を煩わせるものではなく、そもそも燃やすことが出来ない。燃やそうとすると手から離れていってしまう。冷たい石を想起する。火に対して質量を持っている、火にかけることができるものではなく、そもそも火にかけられすらしないものがある。いや火にかけられはするのだが、燃えるということに対して無関心な態度である。燃やすという概念に対置すらされ得ないもの。紙は燃えやすい、森林も燃えやすい。液体も火を宿す、金属も火に対して作用することができる、不燃と呼ぶ。非燃とは何か、火に対して作用しない状態、燃やしてみたところで何の関連も持たない、熱を持つということもない。燃焼の概念の外側にあるものであって、不燃としてしか私たちは処理できないが、可燃／不燃という区別とは無関係な事物である。これは空想のことではない、イメージのことでもない、質量を持たないもののことではない。物質ではあるのだが、燃えること自体を知らない世界の産物である。触られない物事、行為の届かない周縁、燃やせない領域、非燃、否定の領域。